

市津公民館講座

大人の社会科教室第2週

令和3年10月22日
市原里づくりの会 山越国臣

「平将門」を旅する

～各地の将門伝説・伝承を追う～

今回は「平将門を旅する」の第2回目です。今回は平将門の乱（承平・天慶の乱）と、その時代背景について考察しました。承平～天慶年間（931～947）の東国社会と京（みやこ）とのギャップ。上流貴族社会への反発、受領国司とのもめ事などが「乱」に至った要因になりました。これをきっかけに「武士」という概念が生まれました。そして平家、源氏との源平合戦を経て、武家政権に時代は移りました。将門が挑んだ「東国制覇」は夢と終わりましたが、後世に残した意義は大きかった。敗者の平将門。その評価は、今でも「悪者」「英雄」と二派に分かれています。おおむね西日本では「朝敵・謀反人」として見られている傾向が強いようです。一方、東日本では反旗を翻した「男氣」が英雄として称えられ、各地に将門伝説・伝承を残しています。平家発祥の地・上総（市原市）でも将門伝説は残されています。将門の本拠地・茨城県坂東市では、マスコットの“将門くん”を前面に、「わが郷土の英雄」としてPRしています。「平将門を旅する」第二章の幕開け。将門ワールドにご案内します。

【市原の将門伝説を追う】

市原市には、将門によって付けられた地名が2か所あるという（市原のあゆみ）。市原郡誌は「菊間区の北端、字平親王山の竹藪中に古碑あり。四層にして高さ七尺あまり、応安第五年二月三日と刻し、その他磨削りして読む可からず。里伝にいわく将門の東北に走るや、此の地に來たりて居城を構え、以て京の北野に模し、南の方に奈良を置きたるものにして、碑は平新王将門の墓石なり。平新王山の麓の坂を塔の坂と稱す」と記す。また、<将門滅亡後その他の遺物を埋めたる所にして、後に建つ>とも紹介。あるいは、平将門が新皇として除目（人事）で上総介に任じた興世王の墓ではないかともいう説。興世王は、将門の乱終息後に上総で捕えられ、殺されている。地元で平親王山と呼ばれていた塚は、「菊間新皇塚古墳」で、県営菊間団地の造成で消滅。1973年～1974年に発掘調査が行われた。塚の塔頂に宝篋印塔があった。現在は、国分寺（市原市）の境内に移されている。高さ2.35mで安山岩製。基礎部に「応安第五（1372）壬子」「十二月三日」の銘。南北朝時代の石塔で、市原市内には同時代、同造りの宝篋印塔が中高根の常住寺にある。共に市指定有形文化財に指定されている。室町幕府・足利義満の時代だった。

平新王山の将門伝承では、茨城県出身で農林水産大臣などを歴任した政治家の赤城宗徳さんが、面白い見解を示している。桓武平氏の祖となった高望王が宇多天皇から平の姓を賜

り、国司（介）として上総の地に下ったのが52歳の時だった。自身は能満台地（能満城）に居館を構え、長男の国香を前線の菊間台地に配した。二男・良兼を上総の東北端にあたる横芝光町周辺。それぞれ、子息を上総国府の四周に配して守りを堅固なものにしたとみている。国香は高望の死後も上総に住んだが、新任の上総介と折り合いが悪くなった。こうした経緯から、将門の父・良将の死後、所領の下総を蚕食。常陸国に拠点を移し、地位を高めた国香。京帰りの将門と争い、国府を巻き込んだ「将門の乱」に発展したとしている。

「奈良の地名伝説」。市内の市東地区には、「この地に将門が居館を建て、南部・奈良を模して“奈良”と名付け、大仏を建立した」という伝承があります。郷土史家の青柳至彦氏は「いちばら歴史の散歩道」（市原市農協）の中で、江戸時代の歴史家・中村国香の「房総志料」を紹介。奈良の大仏について「市原郡の人が語ったことには、奈良村というところに銅像の丈余のる遮名仏が草むらの中に苔むして建っている。おそらくこの大仏は平将門が南部の大仏を模倣して建立したのではないだろうか」としている。現在の大仏は、等身の石造り釈迦如来像。文化元年（1804）の銘がある。近くのお堂に安置されていたが、明治元年（1868）に火災により、現在地に移された。奈良の大仏（石造）は、市有形文化財になっている。大仏の建立地は木々に包まれ、昼なお暗い心霊スポット。平将門の靈気が下りてきたような気がした。赤城宗徳さんは著書「将門地誌」のなかで、「将門とあるのは誤りで、上総国府の平高望、あるいは国香が都恋しさのあまり、ここに奈良を模した施設をつくり慰めていたようだ。わたしは国府から10*もある山奥という点から考えて、若者たちが奈良を決勝点に遠乗りのレース（競馬＝くらべうま）したのだろう。特に春の「花見のときに」という見解を示している。

【桔梗塚伝承】 桔梗塚伝承は各地に残っている。まずは桔梗について。将門には、愛妾（側室）がいて、その一人が「桔梗前」でした。将門を討った藤原秀郷の妹とも、平良兼の妾ともいわれ、最後の決戦に際して将門の弱点が“こめかみ”にあると告げ口をしたとされている。この情報で将門が討たれた。ゆえに「桔梗前」は卑きょう者、悪者として将門記では描かれています。市原市の場合は、永吉地区の吉野台（現在浜野ゴルフ場の一部）で、将門山と呼ばれた塚があり、桔梗塚に植えた桔梗は花をつけないという里伝があった。言い伝えでは、桔梗前は戦いを避けて永吉に来ていた。将門戦死の知らせに自害した。里人は、これを哀れみ、塚を築いて手厚く葬ったのだという。現在は、塚の上に建っていた石碑は永吉地区の平野神社境内に移されている。石碑には「南無廿三夜月天子/天保六乙未年二月廿三日/永吉村講中」と刻まれている。郷土史家の青柳至彦氏は、永吉地区の廿三夜講が建立したもので、月天子は月の神様だという。「三夜様」と呼ばれた講で、本来は旧暦の二三日の夜に集まって、食事をしたり念仏を唱えたりして二十三夜の遅い月の出を待った行事だという。なぜ、桔梗塚が永吉地区に。青柳氏は①廿三夜塔の塚を築いたことが忘れられ、将門伝説として、この事が発展した②桔梗伝説とは無関係に、適当な高さなので廿三夜塔を建立した一の2点が考えられると推測する。

【意外な話】 姉崎神社と島穴神社。両社は式内社として知られる古社。市原郡誌によると、

姉崎神社は社伝で祭神は「志那斗弁命（しなとべのみこと）」で風神。島穴神社は「志那都比古命（しなつひこのみこと）」で風神。海上交通の神様。日本武尊の盃、天兒屋根命の三柱を合祀。弟という説も。姉崎という地名由来。この地方を目指した二人の神だったが、姉が先に着いてしまったという。「待つのはいやだ」と、姉崎地区では正月の門松を立てない、松を庭に植えないとい風習が残っている。この二社と平将門との関係は？平将門の乱が起きた時に、勅命により両社は「将門敗れる」と調伏活動をした。そんな歴史が両社に秘められていた。わたしには、長年にわたり疑問があった。上総国府は市原市にあるのに、なぜ一宮（玉前神社）は遠い一宮町にあるのか。国府近くに姉崎神社、島穴神社の式内社があるのに、不思議だなと。一宮制度は中世になってからという。国司の任務は、国内の主だった神社を参ること。簡略するために、まず国府近くに六所神社ができ、それが総社となり、一宮制が導入された。下総国の香取神宮、常陸国の鹿島神宮は別格。上総国の場合はどうだろうか。私見を述べたい。「中世の房総は、平氏が牛耳った。上総（平）広常あたりだろうか推理する。祖先の将門公をおとしめた姉崎、島穴の神は許せない」と、本拠地であった夷隅地区の玉前神社を一宮とした。玉前神社では、総社のような「十二社祭り」が執り行われている。これで謎が解けたような気がした。

【東金市】 東金市には「将門誕生地」伝説が残っている。九十九里海岸に近い御門、中野地区は、上総国の武射郡にあたる。訪ねるのに苦労した。同じような水田と集落が混在する風景が続く。茨城・筑波山のようなランドマークになる目印がない。やっと見つけた御門地区の稻荷神社と水神社は集会所の敷地にあった。正確には神社の敷地に村の集会所が建った。近くの中野地区も誕生地伝説がある。中野バス停前には、将門を想像させる「駒形神社」や「神社」が建っていた。まさに神社銀座が相応しい。地区には、平家の象徴・「巖島神社」も建っていた。御門地区の畑で農作業をしていた高齢女性は「わたしたちは成田山には、お参りに行きませんよ」と語ってくれた。

【千葉市の伝承】 千葉市は平氏一門の千葉氏が千葉城を築いて、北総一帯を支配した一大拠点。将門には7人の影武者がいたという。その影武者たちを祀った七つの塚だという「七天王塚」。千葉市中央区猪鼻の千葉大学医学部構内にある。千葉大医学部は、以前の古色蒼然の威厳ある建物から、近代的なキャンパスに様変わりしていた。塚らしき森を見つけたが、石碑の確認ができなかった。コロナ禍でキャンパスに人影なし、不審者として見られてはいけない。堂々と立ち入ることができなかったからだ。

もう一つは「千葉神社」（祭神は北辰妙見尊星王）。千葉常重が大治元年（1126）に、大椎（緑区あすみが丘）から千葉・猪鼻に拠点を移したのに伴い、妙見菩薩を祀ったのが始まりという。妙見菩薩は北極星、北斗七星を神格化したもの。千葉氏の祖先・良文の時代から、守護神として崇められてきた。江戸時代までは「北斗山尊光院金剛授寺」「妙見寺」として親しまれていた。明治時代になって、神仏分離で「千葉神社」になった。夏の「だらだら祭り」は有名だ。

【佐倉市の伝承】 佐倉市の将門関連の史蹟は、まず町名に「将門町」がある。酒々井町との境界近く、「将門神社(口之宮)」があった。この神社は将門大明神と呼ばれ、平将門が祭神、義民・佐倉惣五郎も合祀されている。石造りの鳥居は、承応3年(1654)に、佐倉藩主の堀田正信が寄進した。一説に将門を討った藤原秀郷が天禄年間(970~974)に、第3子と第4子が相次いで亡くなり、「祟り」を恐れて盃を祀ったのが始まりという。

将門神社近くには「桔梗塚」がある。こもりとした大樹の下、きれいに刈りこまれた草原の中に建っていた。桔梗塚の由来は分からない。将門と縁が深い「八幡神社」も近くにあり、杉木立の長い参道が印象深かった。

【成田市の伝承】 成田といえば「成田山新勝寺」。この新勝寺は、将門と深い関係があった。平将門の乱が起きた時、将門調伏のために創建された。朱雀天皇の勅命で、寛朝僧正が空海の開眼した不動明王を携え、成田の地に、不動明王を前に将門調伏の護摩炊きを行い、満願の日に藤原秀郷・平貞盛軍が将門を討ちとったという。新勝寺は朱雀天皇が「新たに勝つ」と命名したとされる。将門を信仰する人たちにとっては「成田山」は憎き敵なのだ。将門の故郷・下総国猿島郡・豊田郡(坂東市・常総市)人たちは言う。「われわれは今でも成田山に参拝しません」(坂東市市役所職員)とかたくなだ。そのほかの地域にも、成田山を毛嫌いするところがあった。

【我孫子市の伝承】 手賀沼の近く、我孫子市日秀に建っているのが、日秀将門神社(日秀131)だった。カーナビを使っても何度もぐるぐる。ようやくたどり着いたのは夏の夕日が落ちる寸前だった。ところで「日秀」という漢字。難字である。読める人は地元の人か“将門研究家”ぐらいだろうか。市原市の「廿五里(ついでいじ)」と同じぐらいの難度だ。「日秀」と書いて「ひびり」と読みます。平将門の盃が手賀沼を馬に乗って渡り、湖畔から昇天するのを見た村人が、社(将門神社)を建てたのが始まりという。日秀は、日の出が転化してヒビリになったということだ。日秀地区は下総国相馬郡で、将門が幼少期を過ごした地で湖沼地帯。現在の福島県相馬市、南相馬市と深い関係があり、千葉氏(相馬)の一族が奥州(相馬市周辺)に移り住んだ。相馬地方の「相馬野馬追い」は、将門時代の名残なのだという。本殿は石造りの石塔だった。近くには、将門が疲れた身体を清めたと伝わる「将門の井戸」もある。余談だが、この地域(日秀)では、「成田山にはいかない」「キキョウを植えない」「キュウリの輪切りは食べない」の風習が残っている。なぜキュウリの輪切りなのかといえば、平氏(将門)の家紋である九曜紋と形状が似ているからだという。

【柏市の伝承】 柏市岩井地区(市町村合併前の沼南町岩井)。手賀沼近くに建っている「将門神社」(岩井425)。岩井の将門神社にたどり着いたのは、日も落ちた夕刻だった。慌ただしく駆け巡った坂東の旅も、終わりに近づいた。辺りは薄暗く、同じ景色が続くなかを「かつては手賀沼(香取の海)だったのだろうか」と思いつつ、車を走らせた。ようやく台地にあった目的地を捜しあてた。かろうじて何とか写真を写せるが、鳥居が建つのに肝心の神社が見つからない。岩井の青年館が建ち、龍光院というお寺があった。探索の結果、境内の一角に「お社」が建っていることが分かった。流れ造りの宮殿で、小さかった。窮屈で神社の

全景が撮れない。そして、あまりにも暗かった。拝殿は正徳4年(1714)に建設されたという。本殿の基壇部分には、「放れ駒」「鷹眼の人物像」などの精巧な彫り物が施されている。

同寺の地藏尊縁起によると、将門の三女・如蔵尼が父の霊を祠に祀ったのが始まりだという。龍光院では、「将門グッズ」を販売している。この地域でも、「成田山参拝」、「キキョウを植えない」などの風習が残っていた。かつて下総国相馬郡といわれた柏市や我孫子市では、平将門に関係する史蹟が多い。同市藤ヶ谷地区。市内で「相馬」という名字が一番多いのだという。将門の子孫一相馬氏。地区の13軒ほどは、成田山には行かず、自分たちの「不動明王」を信仰。相馬氏にゆかりのふかい「持法院」で、将門の命日の2月14日と初不動に近い日を選んで、供養会を開くという。

【お江戸の将門伝承】 将門伝承のクライマックスはお江戸・東京。久しぶりに東京駅前に降り立った。近代的なビルが林立し、丸の内界隈は大きく様変わりしていた。伝承譚は、何といっても「将門の首」だろう。天慶3年(940)の「石井の戦い」で敗れ、打ち首になった将門。藤原秀郷の手で京に運ばれ、京の都でさらし首になった。その首が、3日後に怖い形相をして飛び立ち、武蔵国豊島郡芝崎村(東京・大手町)に落ちた。一説には、縁者が「首」をもらい受け、ひそかに本拠の下総国ではなく、芝崎村に葬ったとされる。その首塚が建っているのが、東京・大手町1丁目1番地。東京のど真ん中、皇居とは目と鼻の先。昔は、よく東京駅周辺を歩き、地理には自信があった。しかし、近代的な高層ビル群に圧倒されて方向感覚が失われてしまった。ようやく案内板を手掛かりにたどり着いた「首塚」は、ビル群に囲まれた一角のボカリとした空間にあった。塚は将門が亡くなって360年経った鎌倉時代末期の徳治2年(1307)に、当地を訪れた時宗の真教上人が「蓮阿弥陀仏」という法号を与え、あつく供養したのだという。次いで、真教上人は、荒れ果てていた塚のそばの社を修復した。これが「神田明神」の始まり。江戸時代に、徳川家康が大名屋敷を造るのに不便と、現在地(東京・千代田区外神田2丁目16-2)に移された。江戸の時代は、塚だけが大名屋敷の敷地内に保存された。首塚にまつわる「祟り」の話を少し。明治時代になると、大手門周辺は官庁街になった。将門塚は大蔵省の敷地内にあり、関東大震災(1923年)で大蔵省が全焼、塚も崩れた。この震災を契機に庁舎を建てることになり、塚を更地にして仮庁舎を建てた。すると、時の大蔵大臣が謎の死を遂げた。続いて大蔵省の高官ら10数人が相次いで亡くなった。けがをする人も続出したという。「これは将門公の祟りでは」といううわさが広まった。「塚」は神田神社(神田明神)の宮司を祭主に慰霊祭が行われ、元通りに戻された。もう一つ。戦後、日本を占領していた米軍(GHQ)が塚を崩して駐車場にしようとして工事を進めた。その最中に、ブルドーザーを運転していた日本人運転手が車体から転落して亡くなるという事故が起きた。塚が押しつぶされる寸前で、塚の崩壊は免れた。またしても「将門の祟り」とうわさがたった。こうした経緯があり「将門塚」をいじると祟りがあると、今日まで厚く信仰されている。取材していた時も、文章(レジメ)を書いている時も「わたしに祟らないでください」と真に思った。ご利益もあるようだ。サラリーマン風の中年男性は「ご利益があるんです」と、毎日のように参っているそうだ。

神田大明神。正式には神田神社。毎年5月の「神田祭」は、東京（江戸）を代表する「江戸三大祭り」の一つとして知られている。江戸時代の神田明神は江戸の総鎮守として、徳川家の信仰が厚かった。江戸城から見て北東、鬼門の方角にある。祭神は「平将門」と「大己貴命（おうなむちのみこと・大国主）」の二柱だった。それが明治時代になると、「天皇家に反逆した人間を祀るのは何事か」という声（王政復古）が強くなり、「将門公」の神座は損社扱いになってしまった。しかし、明治7年（1874）になって、突然に明治天皇が神田神社を参拝に訪れたという。将門の強力な「崇り」を心配したのだろうか。理由についての記録はないという。その「将門の神」の空いた座に、茨城・大洗磯前神社から「少彦名命（すくなひこのみこと）」が勧請された。明治4年（1872）から、終戦後の昭和59年（1984）まで主祭神の座を追われていたのだ。また神田明神は坂の街だということが、今回の取材を通じてよく分かった。かつてのテレビドラマ「銭形平次」。野村胡堂の「銭形平次捕物控」が原作で、平次は神田明神下の長屋に住んでいた設定。若い頃、「神田明神下の…」の記憶が残っていたが、よく意味が分からなかった。訪れて、こういうことかと実感した。つまり神田明神（神田神社）は、お椀のような台地に建っていたのだ。徳川家康は江戸城を中心とした町を造るのに、怪僧・天海とともに結界を巡らした。平将門の首塚や神田明神など、将門関連の神社を北斗七星の形で配した（レジメ資料参照）。将門の怨霊を結界で封じ、守り神として江戸の繁栄を願うために配置したのだという。

「平将門を旅する」は、これで終了とします。暑い盛りの“平将門行脚”。常に、「自分に“崇り”が襲ってくるのではないかという恐れを抱いての取材でした。一夜漬けの生半可な知識で、みなさまに「平将門」を論じてきましたがお許しください。また、自分としては得るものが大きかった。特に平安時代の世相感が変わりました。ひとつの事象（承平・天慶の乱＝平将門の乱）を通じて、「実はこうではなかったか」と、推理を巡らせること。これこそが歴史の醍醐味、楽しみ、ロマンではないでしょうか。